

# 『葉室麟 洛中洛外をゆく。』

葉室 麟 洛中洛外編集部／著（ベストセラーズ）

小説の舞台となった地を訪れる案内本は数多くありますが、この本は著者が自著の3つの小説に所縁のある地を訪れ、小説に登場する人物や作品、そして自身の人生論について語っています。書名に「洛中洛外をゆく」とあるように、この本では京都のいろんな場所を訪れています。観光地として有名な寺院も多く紹介されているので、「ここは行ったことがある」という方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、この本を読み、葉室麟氏の作品を読んだ上で訪れてみると、また違った見方、楽しみ方ができるのではないかと思えてきます。葉室麟氏のファンの方はもちろん、京都好き、時代小説好きな方にもおすすめの一冊です。

# 『タンタンタンゴはパパふたり』

ジャスティン・リチャード他／作 尾辻 かな子他／訳（ポット出版）

セントラルパーク動物園にいるくちばしの下に黒い線がある2匹のアゴヒモペンギン（ロイとシロ）のお話です。どちらも男の子ですが、とても仲良くいつも一緒でした。この子達は愛し合っていたのです。他の♂（ペンギン）の仲間たちが卵を温めて赤ちゃん♂が生まれているのを見て、彼たちは卵に似た石を見つけ、それを何日も交代で温め続けたのです・・・それを見ていた飼育員が他の♂が放置した卵を彼らの巣へ移しました。その後、彼たちは毎日温め続け、赤ちゃんが誕生し、タンゴと名前がつけられパパが二匹いる♂になりました。動物園の他の家族と同じように仲良く暮らしているという、全て実話のお話です。読み終わってとても心安らぎ、幸せな気持ちになりました。

# 『おかあさんとあたし。1&2』

ムラマツ エリコ・なかがわ みどり／著（大和書房）

こどもはかわいいですか？ おかあさんは好きですか？ 「はい！」と答える人は何%だろうか。本書は二人のユニットによって、どこにでもありそうなおかあさんとあたしの日常のひとコマひとコマが絵とちょっとした文で描かれている。自分が親として出会ったものもあれば、こどもの頃を思い出すものもある。誰もが経験したことがあるようなひとコマだが本書で見ることによって客観視することが出来る。自分が言われてうるさかったあの言葉も今読んでみるとありがたいと思えるかもしれない。今の親子関係がどうであれ、こどもの頃おかあさんという存在がどれほど大きかったかを思い知らされる。おかあさんが好きな人もあまり好きではない人もパラパラと眺めてみてほしい。

# 『ギャンブル依存国家・日本』

帚木 蓬生／著（光文社）

緊急事態宣言を受け不要不急の外出は控えるようにとされているのに、パチンコ・パチスロ店の開店に行列する人々。テレビで見ている異様に感じてしまった人は多いのではないだろうか。この行列に並ぶ人たちを見て「ギャンブル依存」という言葉が思い浮かぶ。

依存症には色々な種類があり、精神科医でもある著書は「ギャンブル障害」と分類している。症例としてギャンブルのせいで多大なる借金を背負った人、家族から見放された人、殺人をしてしまった人等多く挙げられているのだが、この思考回路が中々理解できない。ギャンブルにはまっている人はもう脳から出る物質で変化が起こってしまっており、正常な思考に結びつかないのだそう。ではどうしたらこの依存から立ち直ることができ、どうやってその気持ちを理解したらいいのか。とても興味深い一冊である。